

第5章

翌朝、亭主のトムが、いつものように歯の抜けた口でニッコリ笑いながら、紅茶を持ってハリーを起こしにきた。

ハリーは着替えをすませ、むずかるヘドウィグをなだめすかして籠に入れた。

そのときドアがバーンと開いて、トレーナーを頭からかぶりながら、ロンがイライラ顔で入ってきた。

「一刻も早く汽車に乗ろう。ホグワーツに行ったら、せめて、パーシーと離れられるしな。パーシーのやつ、今度は、ペネロピー・クリアウォーターの写真に僕が紅茶をこぼしたって責めるんだ」

ロンがしかめっ面をした。

「ほら、パーシーのガールフレンド。鼻の頭が赤くしみになったからって、写真の額に顔を隠しちまってさ……」

「話があるんだ」

ハリーがそう切り出したが、ちょうどフレッドとジョージが覗き込んだので話が途切れた。

二人はロンがパーシーをカンカンに怒らせたことを誉めるために顔を覗かせたのだ。

朝食をとりみんなを下りていくと、ウィーズリー氏が眉根を寄せながら「日刊予言者新聞」の一面記事を読んでいた。

ウィーズリー夫人はハーマイオニーとジニーに自分が娘のころ作った「愛の妙薬」のことを話していた。

三人ともくすくす笑ってばかりいた。

「何を言いかけたんだい？」テーブルに着きながらロンが尋ねた。

「あとで」ちょうどパーシーが鼻息も荒く入ってきたので、ハリーは小声で答えた。

旅立ちのごたごた騒ぎで、ハリーはロンやハーマイオニーに話す機会を失った。

「漏れ鍋」の狭い階段を、全員のトランクを

Chapter 5

The Dementor

Tom woke Harry the next morning with his usual toothless grin and a cup of tea. Harry got dressed and was just persuading a disgruntled Hedwig to get back into her cage when Ron banged his way into the room, pulling a sweatshirt over his head and looking irritable.

“The sooner we get on the train, the better,” he said. “At least I can get away from Percy at Hogwarts. Now he’s accusing me of dripping tea on his photo of Penelope Clearwater. You know,” Ron grimaced, “his *girlfriend*. She’s hidden her face under the frame because her nose has gone all blotchy. ...”

“I’ve got something to tell you,” Harry began, but they were interrupted by Fred and George, who had looked in to congratulate Ron on infuriating Percy again.

They headed down to breakfast, where Mr. Weasley was reading the front page of the *Daily Prophet* with a furrowed brow and Mrs. Weasley was telling Hermione and Ginny about a love potion she’d made as a young girl. All three of them were rather giggly.

“What were you saying?” Ron asked Harry as they sat down.

“Later,” Harry muttered as Percy stormed in.

Harry had no chance to speak to Ron or

汗だくで運び出して出口近くに積み上げたり、ヘドウィグやら、パーシーのコ! ハズクのヘルメスが入った籠をそのまた上に載せたりと、何やかやでそれどころではなかったのだ。

山と積まれたトランクのわきに、小さな柳編みの籠が置かれ、シャーッシャーッと激しい音を出していた。

「大丈夫よ、クルックシャンクス」

ハーマイオニーが籠の外から猫撫で声で呼びかけた。

「汽車に乗ったら出してあげるからね」

「出すな!」ロンがビシヤリと言った。

「かわいそうなスキャバーズはどうなる? エ?」

ロンは自分の胸ポケットを指差した。

ポッコリと盛り上がっている。

スキャバーズが中で丸くなって縮こまっているらしい。

外で魔法省からの車を待っていたウィーズリー氏が、食堂に首を突き出した。

「車が来たよ。ハリー、おいで」

旧型の深緑色の車が二台停車していた。その先頭の車までのわずかな距離を、ウィーズリー氏はハリーに添って歩いた。

二台ともエメラルド色のピロードのスーツを着込んだ人目を忍ぶような様子の魔法使いが運転していた。

「ハリー、さあ、中へ」

ウィーズリー氏が雑踏の右から左まですばやく日を走らせながら促した。

ハリーは後ろの座席に座った。間もなくハーマイオニーとロンが乗り込み、そして、ロンにとってはむかつくパーシーも乗り込んだ。

キングズ・クロス駅までの移動は、ハリーの「夜の騎士バス」の旅に比べれば、あっけないものだった。

Hermione in the chaos of leaving; they were too busy heaving all their trunks down the Leaky Cauldron's narrow staircase and piling them up near the door, with Hedwig and Hermes, Percy's screech owl, perched on top in their cages. A small wickerwork basket stood beside the heap of trunks, spitting loudly.

"It's all right, Crookshanks," Hermione cooed through the wickerwork. "I'll let you out on the train."

"You won't," snapped Ron. "What about poor Scabbers, eh?"

He pointed at his chest, where a large lump indicated that Scabbers was curled up in his pocket.

Mr. Weasley, who had been outside waiting for the Ministry cars, stuck his head inside.

"They're here," he said. "Harry, come on."

Mr. Weasley marched Harry across the short stretch of pavement toward the first of two old-fashioned dark green cars, each of which was driven by a furtive-looking wizard wearing a suit of emerald velvet.

"In you get, Harry," said Mr. Weasley, glancing up and down the crowded street.

Harry got into the back of the car and was shortly joined by Hermione, Ron, and, to Ron's disgust, Percy.

The journey to King's Cross was very uneventful compared with Harry's trip on the Knight Bus. The Ministry of Magic cars seemed almost ordinary, though Harry noticed

魔法省の車はほとんどまともといってもよかった。ただ、バー！ンおじさんの新しい社用車なら絶対に通り抜けられないような狭い隙間を、この事がすり抜けられることにハリーは気づいた。

キングズ・クロス駅に着いたときは、まだ二十分の余裕があった。

魔法省の運転手が、カートを探してきて、トランクを車から降ろし、帽子にちょっと手をやってウィーズリー氏に向かって挨拶した。

走り去った車は、なぜか信号待ちをしている車の列を飛び越して、一番前につけていた。

ウィーズリー氏は駅に入るまでずっと、ハリーの肘のあたりにピッタリ取りついていていた。

「よし、それじゃ」ウィーズリー氏が周りをちらちら見ながら言った。

「我々は大所帯だから、二人ずつ行こう。わたしが最初にハリーと一緒に通り抜けるよ」

ウィーズリー氏は、ハリーのカートを押しながら、9番線と10番線の間にある柵の方へぶらぶらと歩きながら、ちょうど9番線に到着した長距離列車のインターシティ125号に、興味津々のようだった。

おじさんはハリーに意味ありげに目配せをし、何気なく柵に寄りかかった。

ハリーもまねをした。

つぎの瞬間、ハリーたちは硬い金属の障壁を通り抜け、9と4分の3番線ホームに横様に倒れ込んだ。

目を上げると、紅色の機関車、ホグワーツ特急が煙を吐いていた。

その煙の下で、ホームいっぱいに溢れた魔女や魔法使いが、子どもたちを見送り、汽車に乗せていた。

ハリーの背後に突然パーシーとジニーが現われた。

走って柵を通り抜けたらしく息を切らしている。

「あ、ペネロピーがいる！」

that they could slide through gaps that Uncle Vernon's new company car certainly couldn't have managed. They reached King's Cross with twenty minutes to spare; the Ministry drivers found them trolleys, unloaded their trunks, touched their hats in salute to Mr. Weasley, and drove away, somehow managing to jump to the head of an unmoving line at the traffic lights.

Mr. Weasley kept close to Harry's elbow all the way into the station.

"Right then," he said, glancing around them. "Let's do this in pairs, as there are so many of us. I'll go through first with Harry."

Mr. Weasley strolled toward the barrier between platforms nine and ten, pushing Harry's trolley and apparently very interested in the InterCity 125 that had just arrived at platform nine. With a meaningful look at Harry, he leaned casually against the barrier. Harry imitated him.

In a moment, they had fallen sideways through the solid metal onto platform nine and three-quarters and looked up to see the Hogwarts Express, a scarlet steam engine, puffing smoke over a platform packed with witches and wizards seeing their children onto the train.

Percy and Ginny suddenly appeared behind Harry. They were panting and had apparently taken the barrier at a run.

"Ah, there's Penelope!" said Percy, smoothing his hair and going pink again.

パーシーが髪を撫でつけ、いちだんと頬を紅潮させた。

胸に輝くバッジを、ガールフレンドが絶対見逃さないようにと、ふん反り返って歩くパーシーを見て、ジニーとハリーは顔を見合わせ、パーシーに見られないよう横を向いて吹き出した。

ウィーズリー家の残りのメンバーとハーマイオニーが到着したところで、ハリーとウィーズリー氏が先頭に立って後尾車両の方に歩いていった。

満員のコンパートメントを通り過ぎ、ほとんど誰もいない車両を見つけ、そこにトランクを積み込み、ヘドウィグとクルックシャンクスを荷物棚に載せた。

それからウィーズリー夫妻に別れを告げるために、もう一度列車の外に出た。

ウィーズリー夫人は子どもたち全員にキスをし、それからハーマイオニー、最後にハリーにキスした。

ハリーはドギマギしながらも、おばさんにギュッと抱き締められてとてもうれしかった。

「ハリー、むちゃしないでね。いいこと？」
おばさんはハリーを離したが、なぜか目が潤んでいた。それから巨大な手提げカバンを取り出した。

「みんなにサンドイッチを作ってきたわ。はい、ロン……いいえ、違いますよ。コンビーフじゃありません……フレッド？ フレッドはどこ？ はい、あなたのですよ……」

「ハリー」ウィーズリー氏がそっと呼んだ。
「ちょっとこっちへおいで」

おじさんは顎で柱の方を示した。ウィーズリー夫人を囲む群れを抜け出し、ハリーはウィーズリー氏について柱の陰に入った。

「君が出発する前に、どうしても言っておかなければならないことがある——」

ウィーズリー氏の声は緊張していた。

「おじさん、いいんです。僕、もう知ってい

Ginny caught Harry's eye, and they both turned away to hide their laughter as Percy strode over to a girl with long, curly hair, walking with his chest thrown out so that she couldn't miss his shiny badge.

Once the remaining Weasleys and Hermione had joined them, Harry and Ron led the way to the end of the train, past packed compartments, to a carriage that looked quite empty. They loaded the trunks onto it, stowed Hedwig and Crookshanks in the luggage rack, then went back outside to say good-bye to Mr. and Mrs. Weasley.

Mrs. Weasley kissed all her children, then Hermione, and finally, Harry. He was embarrassed, but really quite pleased, when she gave him an extra hug.

“Do take care, won't you, Harry?” she said as she straightened up, her eyes oddly bright. Then she opened her enormous handbag and said, “I've made you all sandwiches. ... Here you are, Ron ... no, they're not corned beef. ... Fred? Where's Fred? Here you are, dear. ...”

“Harry,” said Mr. Weasley quietly, “come over here a moment.”

He jerked his head toward a pillar, and Harry followed him behind it, leaving the others crowded around Mrs. Weasley.

“There's something I've got to tell you before you leave ——” said Mr. Weasley, in a tense voice.

“It's all right, Mr. Weasley,” said Harry. “I

ます」

「知っている？ どうしてまた？」

「僕——あの——おじさんとおばさんが昨日の夜、話しているのを聞いてしまったんです。僕、聞こえてしまったんです」

それからハリーは慌ててつけ加えた。

「ごめんなさい——」

「できることなら君にそんな知らせ方をしたくはなかった」

ウィーズリー氏は気遣わしげに言った。

「いいえ——これでよかったです。ほんとうに。これで、おじさんはファッジ大臣との約束を破らずにすむし、僕は何が起きているのかがわかったんですから」

「ハリー、きっと怖いだろうね——」

「怖くありません」ハリーは心からそう答えた。

ウィーズリー氏が信じられないという顔をしたので、

「ほんとうです」とつけ加えた。

「僕、強がってるんじゃないです。でも、まじめに考えて、シリウス・ブラックがヴォルデモートより手強いなんてこと、ありえないでしょう？」

ウィーズリー氏はその名を聞いただけでひるんだが、聞かなかったふりをした。

「ハリー、君は、ファッジが考えているより、なんというか、ずっと肝が据わっている。そのことはわたしも知っていた。君が怖がっていないのは、わたしとしてももちろんうれしい。しかしだ——」

「アーサー！」

ウィーズリー夫人が呼んだ。

おばさんは羊飼いが群れを追うように、みんなを汽車に追い込んでいた。

「アーサー、何してらっしゃるの？ もう出てしまいますよ！」

「モリー母さん。ハリーはいま行くよ！」

already know.”

“You know? How could you know?”

“I — er — I heard you and Mrs. Weasley talking last night. I couldn’t help hearing,” Harry added quickly. “Sorry —”

“That’s not the way I’d have chosen for you to find out,” said Mr. Weasley, looking anxious.

“No — honestly, it’s okay. This way, you haven’t broken your word to Fudge and I know what’s going on.”

“Harry, you must be very scared —”

“I’m not,” said Harry sincerely. “*Really*,” he added, because Mr. Weasley was looking disbelieving. “I’m not trying to be a hero, but seriously, Sirius Black can’t be worse than Voldemort, can he?”

Mr. Weasley flinched at the sound of the name but overlooked it.

“Harry, I knew you were, well, made of stronger stuff than Fudge seems to think, and I’m obviously pleased that you’re not scared, but —”

“Arthur!” called Mrs. Weasley, who was now shepherding the rest onto the train. “Arthur, what are you doing? It’s about to go!”

“He’s coming, Molly!” said Mr. Weasley but he turned back to Harry and kept talking in a lower and more hurried voice. “Listen, I want you to give me your word —”

“— that I’ll be a good boy and stay in the

そう言いながら、ウィーズリー氏はもう一度ハリーの方に向き直り、声を一層低くして、急き込んでこう言った。

「いいかね、約束してくれー」

「ー僕がおとなしくして城の外に出ないってことですか？」ハリーは憂鬱だった。

「それだけじゃない」おじさんはこれまでハリーが見たことがないような真剣な顔をしていた。

「ハリー、わたしに誓ってくれ。ブラックを探したりしないって」

「えっ？」ハリーはウィーズリー氏を見つめた。

汽笛がボーッと大きく鳴り響いた。駅員たちが汽車のドアをつぎつぎと閉めはじめた。

「ハリー、約束してくれ」ウィーズリー氏はますます急き込んだ。

「どんなことがあってもー」

「僕を殺そうとしている人を、なんで僕の方から探したりするんです？」ハリーはきょとんとして言った。

「誓ってくれ。君が何を聞こうとー」

「アーサー、早く！」ウィーズリー夫人が叫んだ。

汽車はシューッと煙を吐き、動き出した。ハリーはドアまで走った。

ロンがドアをパッと開け、一歩下がってハリーを乗せた。みんなが窓から身を乗り出し、ウィーズリー夫妻に向かって手を振り、汽車がカーブして二人の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

「君たちだけに話したいことがあるんだ」

汽車がスピードを上げはじめたとき、ハリーはロンとハーマイオニーに向かって囁いた。

「ジニー、どっかに行ってて」ロンが言った。

「あら、ごあいさつね」ジニーは機嫌を損

castle?” said Harry gloomily.

“Not entirely,” said Mr. Weasley, who looked more serious than Harry had ever seen him. “Harry, swear to me you won’t go *looking* for Black.”

Harry stared. “What?”

There was a loud whistle. Guards were walking along the train, slamming all the doors shut.

“Promise me, Harry,” said Mr. Weasley, talking more quickly still, “that whatever happens —”

“Why would I go looking for someone I know wants to kill me?” said Harry blankly.

“Swear to me that whatever you might hear —”

“Arthur, quickly!” cried Mrs. Weasley.

Steam was billowing from the train; it had started to move. Harry ran to the compartment door and Ron threw it open and stood back to let him on. They leaned out of the window and waved at Mr. and Mrs. Weasley until the train turned a corner and blocked them from view.

“I need to talk to you in private,” Harry muttered to Ron and Hermione as the train picked up speed.

“Go away, Ginny,” said Ron.

“Oh, that’s nice,” said Ginny huffily, and she stalked off.

Harry, Ron, and Hermione set off down the corridor, looking for an empty compartment,

ね、プリプリしながら離れていった。

ハリー、ロン、ハーマイオニーは誰もいないコンパートメントを探して通路を歩いた。

どこもいっぱいだったが、最後尾にただ一つ空いたところがあった。

客が一人いるだけだった。男が一人、窓側の席でぐっすり眠っていた。

三人はコンパートメントの入口で中を確かめた。ホグワーツ特急はいつも生徒のために貸切になり、食べ物をワゴンで売りにくる魔女以外は、車中で大人を見たことがなかった。

見知らぬ客は、あちこち継ぎの当たった、かなくみすばらしいローブを着ていた。

疲れ果てて、病んでいるようにも見えた。まだかなり若いのに、鳶色の髪は白髪混じりだった。

「この人、誰だと思う？」

窓から一番遠い席を取り、引き戸を閉め、三人が腰を落ち着けたとき、ロンが声をひそめて開いた。

「ルーピン先生」ハーマイオニーがすぐに答えた。

「どうして知ってるんだ？」

「カバンに書いてあるわ」

ハーマイオニーは男の頭の上にある荷物棚を指差した。

くたびれた小振りのカバンは、きちんとつなぎ合わせた紐でぐるぐる巻きになっていた。

カバンの片隅に、ルーピン教授と、はがれかけた文字が押してあった。

「いったい何を教えるんだろ？」

ルーピン先生の青白い横顔を見て顔をしかめながらロンが言った。

「決まってるじゃない」ハーマイオニーが小声で言った。

「空いているのは一つしかないでしょ？『闇の魔術に対する防衛術』よ」

ハリーも、ロンも、ハーマイオニーも、「聞

but all were full except for the one at the very end of the train.

This had only one occupant, a man sitting fast asleep next to the window. Harry, Ron, and Hermione checked on the threshold. The Hogwarts Express was usually reserved for students and they had never seen an adult there before, except for the witch who pushed the food cart.

The stranger was wearing an extremely shabby set of wizard's robes that had been darned in several places. He looked ill and exhausted. Though quite young, his light brown hair was flecked with gray.

“Who d’you reckon he is?” Ron hissed as they sat down and slid the door shut, taking the seats farthest away from the window.

“Professor R. J. Lupin,” whispered Hermione at once.

“How d’you know that?”

“It’s on his case,” she replied, pointing at the luggage rack over the man’s head, where there was a small, battered case held together with a large quantity of neatly knotted string. The name *Professor R. J. Lupin* was stamped across one corner in peeling letters.

“Wonder what he teaches?” said Ron, frowning at Professor Lupin’s pallid profile.

“That’s obvious,” whispered Hermione. “There’s only one vacancy, isn’t there? Defense Against the Dark Arts.”

Harry, Ron, and Hermione had already had

の魔術に対する防衛術」の授業を二人の先生から受けたが、二人とも一年しかもたなかった。

この学科は呪われているといううわさがたっていた。

「ま、この人がちゃんと教えられるならいいけどね」ロンはダメだろうという口調だ。

「強力な呪いをかけられたら一発で参っちゃうように見えないか？　ところで……」ロンはハリーの方を向いた。

「なんの話なんだい？」

ハリーはウィーズリー夫妻の言い合いのことや、いましがたウィーズリー氏が警告したことを全部二人に話した。

聞き終わると、ロンは愕然としていたし、ハーマイオニーは両手で口を押さえていた。

ハーマイオニーは手を離し、こう言った。

「シリウス・ブラックが脱獄したのは、あなたを狙うためですって？　ああ、ハリー……ほんとに、ほんとに気をつけなきゃ。自分からわざわざーラブルに飛び込んでいったりしないでね。ね、ハリー……」

「僕、自分から飛び込んでいったりするもんか」ハリーはじれったそうに言った。

「いつもトラブルの方が飛び込んでくるんだ」

「ハリーを殺そうとしてる狂人だぜ。自分からのこのご会いにいくバカがいるかい？」ロンは震えていた。

二人とも、ハリーが考えた以上に強い反応を示した。ロンもハーマイオニーもブラックのことをハリーよりずっと恐れているようだった。

「ブラックがどうやってアズカバンから逃げたのか、誰にもわからない。これまで脱獄した者は誰もいない。しかもブラックは一番厳しい監視を受けていたんだ」ロンは落ち着いた様子で話した。

「だけど、また捕まるでしょう？」ハーマイオニーが力を込めて言った。

two Defense Against the Dark Arts teachers, both of whom had lasted only one year. There were rumors that the job was jinxed.

“Well, I hope he’s up to it,” said Ron doubtfully. “He looks like one good hex would finish him off, doesn’t he? Anyway …” He turned to Harry. “What were you going to tell us?”

Harry explained all about Mr. and Mrs. Weasley’s argument and the warning Mr. Weasley had just given him. When he’d finished, Ron looked thunderstruck, and Hermione had her hands over her mouth. She finally lowered them to say, “Sirius Black escaped to come after *you*? Oh, Harry … you’ll have to be really, really careful. Don’t go looking for trouble, Harry —”

“I don’t go looking for trouble,” said Harry, nettled. “Trouble usually finds *me*.”

“How thick would Harry have to be, to go looking for a nutter who wants to kill him?” said Ron shakily.

They were taking the news worse than Harry had expected. Both Ron and Hermione seemed to be much more frightened of Black than he was.

“No one knows how he got out of Azkaban,” said Ron uncomfortably. “No one’s ever done it before. And he was a top-security prisoner too.”

“But they’ll catch him, won’t they?” said Hermione earnestly. “I mean, they’ve got all

「だって、マグルまで総動員してブラックを追跡してるじゃない……」

「なんの音だろう？」突然ロンが言った。
小さく口笛を吹くような音が、かすかにどこからか聞こえてくる。

三人はコンパートメントを見回した。

「ハリー、君のトランクからだ」
ロンは立ち上がって荷物棚に手を伸ばし、やがてハリーのローブの間から「携帯かくれん防止器」を引っ張り出した。

ロンの手の平の上でそれは激しく回転し、眩しいほどに輝いていた。

「それ、スニーコスコープ？」ハーマイオニーが興味津々で、もっとよく見ようと立ち上がった。

「ウン……だけど、安モンだよ」ロンが言った。

「エロールの脚にハリーへの手紙を括りつけようとしたら、メッチャ回ったもの」

「そのとき何か怪しげなことをしてなかった？」ハーマイオニーが突っ込んだ。

「してない！でも――・・エロールを便っちゃいけなかったんだ。じいさん、長旅には向かないしね……だけど、ハリーにプレゼントを届けるのに、ほかにどうすりゃよかったんだい？」

「早くトランクに戻して」スニーコスコープが耳をつんざくような音を出したので、ハリーがルーピン先生の方を顎で指しながら注意した。

「じゃないと、この人が目を覚ますよ」

ロンはスニーコスコープをバー！ンおじさんのとびきりオンボロ靴下の中に押し込んで音を殺し、その上からトランクのふたを閉めた。

「ホグズミードでそれをチェックしてもらえるかもしれない」ロンが席に座り直した。

「『ダービシュ・アンド・バングズ』の店で、魔法の機械とかいろいろ売ってるって、

the Muggles looking out for him too. ...”

“What’s that noise?” said Ron suddenly.

A faint, tinny sort of whistle was coming from somewhere. They looked all around the compartment.

“It’s coming from your trunk, Harry,” said Ron, standing up and reaching into the luggage rack. A moment later he had pulled the Pocket Sneakoscope out from between Harry’s robes. It was spinning very fast in the palm of Ron’s hand and glowing brilliantly.

“Is that a *Sneakoscope*?” said Hermione interestedly, standing up for a better look.

“Yeah ... mind you, it’s a very cheap one,” Ron said. “It went haywire just as I was tying it to Errol’s leg to send it to Harry.”

“Were you doing anything untrustworthy at the time?” said Hermione shrewdly.

“No! Well ... I wasn’t supposed to be using Errol. You know he’s not really up to long journeys ... but how else was I supposed to get Harry’s present to him?”

“Stick it back in the trunk,” Harry advised as the Sneakoscope whistled piercingly, “or it’ll wake him up.”

He nodded toward Professor Lupin. Ron stuffed the Sneakoscope into a particularly horrible pair of Uncle Vernon’s old socks, which deadened the sound, then closed the lid of the trunk on it.

“We could get it checked in Hogsmeade,” said Ron, sitting back down. “They sell that

フレッドとジョージが教えてくれた」

「ホグズミードのこと、よく知ってるの？」
ハーマイオニーが意気込んだ。

「イギリスで唯一の完全にマグルなしの村だ
って本で読んだけど？」

「ああ、そうだと思うよ」ロンはそんなこと
には関心がなさそうだ。

「僕、だからそこに行きたいってわけじゃな
いよ。ハニーデュークスの店に行ってみたい
だけさ！」

「それって、なに？」ハーマイオニーが聞いた。

「お菓子屋さ」ロンはうっとり夢見る顔にな
った。

「なんんでもあるんだ……激辛ペッパーー
食べると、口から煙が出るんだ。それにイチ
ゴムースやクリームがいっぱい詰まってる大
粒のふっくらチョコレートーそれから砂糖
羽ペン、授業中にこれを舐めていたって、つ
ぎに何を書こうか考えているみたいに見える
んだ」

「でも、ホグズミードつてとってもおもしろ
いところなんでしょう？」

ハーマイオニーがしつこく聞いた。

「『魔法の史跡』を読むと、その旅籠は一
六一二年のゴブリンの反乱で本部になったと
ころだし、『叫びの屋敷』はイギリスで一番
恐ろしい呪われた幽霊屋敷だって書いてある
しー」

「ーそれにおっきな炭酸入りキャンディ。
舐めてる間、地上から数センチ浮き上がるん
だ」

ロンはハーマイオニーの言ったことを全然聞
いてはいなかった。

ハーマイオニーはハリーの方に向き直った。

「ちょっと学校を離れて、ホグズミードを採
検するのも素敵じゃない？」

「だろうね」ハリーは沈んだ声で言った。

「見てきたら、僕に教えてくれなきゃ」

sort of thing in Dervish and Banges, magical
instruments and stuff. Fred and George told
me.”

“Do you know much about Hogsmeade?”
asked Hermione keenly. “I’ve read it’s the only
entirely non-Muggle settlement in Britain —”

“Yeah, I think it is,” said Ron in an offhand
sort of way, “but that’s not why I want to go. I
just want to get inside Honeydukes!”

“What’s that?” said Hermione.

“It’s this sweetshop,” said Ron, a dreamy
look coming over his face, “where they’ve got
everything. ... Pepper Imps — they make you
smoke at the mouth — and great fat
Chocoballs full of strawberry mousse and
clotted cream, and really excellent sugar quills,
which you can suck in class and just look like
you’re thinking what to write next —”

“But Hogsmeade’s a very interesting place,
isn’t it?” Hermione pressed on eagerly. “In
Sites of Historical Sorcery it says the inn was
the headquarters for the 1612 goblin rebellion,
and the Shrieking Shack’s supposed to be the
most severely haunted building in Britain —”

“— and massive sherbet balls that make you
levitate a few inches off the ground while
you’re sucking them,” said Ron, who was
plainly not listening to a word Hermione was
saying.

Hermione looked around at Harry.

“Won’t it be nice to get out of school for a
bit and explore Hogsmeade?”

<p>「どうということ？」ロンが聞いた。</p> <p>「僕、行けないんだ。ダーズリーおじさんが許可証にサインしなかったし、ファッジ大臣もサインしてくれないんだ」ロンがとんでもないという顔をした。</p> <p>「許可してもらえないって？ そんなーそりゃないぜーマクゴナガルか誰かが許可してくれるよー」</p> <p>ハリーは力なく笑った。グリフィンボールの寮監、マクゴナガル先生はとても厳しい先生だ。</p> <p>「ーじゃなきゃ、フレッドとジョージに聞けばいい。あの二人なら、城から抜け出す秘密の道を全部知ってるー」</p> <p>「ロン！」ハーマイオニーの厳しい声が飛んだ。</p> <p>「ブラックが捕まってないのに、ハリーは学校からこっそり抜け出すべきじゃないわー」</p> <p>「ウン、僕が許可してくださいってお願いしたら、マクゴナガル先生はそうおっしゃるだろうな」ハリーが残念そうに言った。</p> <p>「だけど、僕たちがハリーと一緒にいれば、ブラックはまさかー」</p> <p>ロンがハーマイオニーに向かって威勢よく言った。</p> <p>「まあ、ロン、ばかなこと言わないで」ハーマイオニーは手厳しい。</p> <p>「ブラックは雑踏のど真ん中であんなに大勢を殺したのよ。私たちがハリーのそばにいれば、ブラックが尻込みすると、本気でそう思ってるの？」</p> <p>ハーマイオニーはクルックシャンクスの入った籠の紐を解こうとしていた。</p> <p>「そいつを出したらダメ！」ロンが叫んだが、遅かった。</p> <p>クルックシャンクスがヒラリと籠から飛び出し、伸びに続いて欠伸をしたと思うと、ロンの膝に跳び乗った。</p> <p>ロンのポケットの膨らみがプルブル震えた。</p>	<p>“’Spect it will,” said Harry heavily. “You’ll have to tell me when you’ve found out.”</p> <p>“What d’you mean?” said Ron.</p> <p>“I can’t go. The Dursleys didn’t sign my permission form, and Fudge wouldn’t either.”</p> <p>Ron looked horrified.</p> <p>“<i>You’re not allowed to come?</i> But — no way — McGonagall or someone will give you permission —”</p> <p>Harry gave a hollow laugh. Professor McGonagall, head of Gryffindor House, was very strict.</p> <p>“— or we can ask Fred and George, they know every secret passage out of the castle —”</p> <p>“Ron!” said Hermione sharply. “I don’t think Harry should be sneaking out of school with Black on the loose —”</p> <p>“Yeah, I expect that’s what McGonagall will say when I ask for permission,” said Harry bitterly.</p> <p>“But if <i>we’re</i> with him,” said Ron spiritedly to Hermione, “Black wouldn’t dare —”</p> <p>“Oh, Ron, don’t talk rubbish,” snapped Hermione. “Black’s already murdered a whole bunch of people in the middle of a crowded street. Do you really think he’s going to worry about attacking Harry just because <i>we’re</i> there?”</p> <p>She was fumbling with the straps of Crookshanks’s basket as she spoke.</p> <p>“Don’t let that thing out!” Ron said, but too</p>
--	--

ロンは怒ってクルックシャンクスを払い除けた。

「どけよ！」

「ロン、やめて！」ハーマイオニーが怒った。

ロンが言い返そうとしたそのとき、ルーピン先生がもぞもぞ動いた。

三人ともぎくりとして先生を見たが、先生は頭を反対側に向けただけで、わずかに口を開けて眠り続けた。

ホグワーツ特急は順調に北へと走り、外には雲がだんだん厚く垂れ込め、車窓には、一段と暗く荒涼とした風景が広がっていった。

コンパートメントの外側の通路では生徒が追いかけてこをして往ったり来たりしていた。

クルックシャンクスは空いている席に落ち着き、ぺちゃんこの顔をロンに向け、黄色い目をロンのシャツのポケットに向けていた。

一時になると、丸っこい魔女が食べ物を積んだカートを押して、コンパートメントのドアの前にやってきた。

「この人を起こすべきかなあり」

ルーピン先生の方を顎で指し、ロンが戸惑いながら言った。

「何か食べた方がいいみたいに見えるけど」ハーマイオニーがそっとルーピン先生のそばに行った。

「あのー先生？ もしもしー先生？」先生は身じろぎもしない。

「大丈夫よ、嬢ちゃん」

大きな魔女鍋スポンジケーキを一山ハリーに渡しながら、魔女が言った。

「目を覚ましたときお腹がすいてるようなら、わたしは一番前の運転手のところにいますからね」

「この人、眠ってるんだよね？」

魔女のおばさんがコンパートメントの引き戸を閉めたとき、ロンがこっそり言った。

late; Crookshanks leapt lightly from the basket, stretched, yawned, and sprang onto Ron's knees; the lump in Ron's pocket trembled and he shoved Crookshanks angrily away.

“Get out of here!”

“Ron, don't!” said Hermione angrily.

Ron was about to answer back when Professor Lupin stirred. They watched him apprehensively, but he simply turned his head the other way, mouth slightly open, and slept on.

The Hogwarts Express moved steadily north and the scenery outside the window became wilder and darker while the clouds overhead thickened. People were chasing backward and forward past the door of their compartment. Crookshanks had now settled in an empty seat, his squashed face turned toward Ron, his yellow eyes on Ron's top pocket.

At one o'clock, the plump witch with the food cart arrived at the compartment door.

“D'you think we should wake him up?” Ron asked awkwardly, nodding toward Professor Lupin. “He looks like he could do with some food.”

Hermione approached Professor Lupin cautiously.

“Er — Professor?” she said. “Excuse me — Professor?”

He didn't move.

“Don't worry, dear,” said the witch as she handed Harry a large stack of Cauldron Cakes.

「つまり……死んでないよね。ね？」

「ない、ない。息をしてるわ」

ハリーがよこしたケーキを取りながら、ハーマイオニーが囁いた。

ルーピン先生は社交的な道連れではなかったかもしれないが、コンパートメンターにいてくれたことで役に立った。

昼下がりになって、車窓から見える丘陵風景が霞むほどの雨が降り出したとき、通路でまた足音がした。

ドアを開けたのは三人が一番毛嫌いしている連中だった。

ドラコ・マルフォイと、その両脇に腰巾着のピンセント・クラブ、グレゴリー・ゴイルだ。

ドラコ・マルフォイとハリーは、ホグワーツ行特急での最初の旅で出会ったときからの敵同士だ。

顎の尖った青白い顔にいつもせせら笑いを浮かべているマルフォイは、スリザリン寮生だった。

スリザリン寮代表のクィディッチ・チームではシーカーで、ハリーのグリフィンボール寮チームでのポジションと同じだ。

クラブとゴイルは、マルフォイの命令に従うために存在するかのよう二人だった。

両方とも筋肉隆々の肩幅ガッチリ体型で、クラブの方が背が高く、鍋底カットのヘアスタイルで太い首。

ゴイルはたわしのような短く刈り込んだ髪で、長いゴリラのような腕をぶら下げている。

「へえ、誰かと思えば」

コンパートメントのドアを開けながら、マルフォイはいつもの気取った口調で言った。

「ポッター、ポッターのいかれポンチと、ウィーズリー、ウィーズルのコソコソ君じゃあないか！」

クラブとゴイルはトロール並みのアホ笑い

“If he’s hungry when he wakes, I’ll be up front with the driver.”

“I suppose he *is* asleep?” said Ron quietly as the witch slid the compartment door closed. “I mean — he hasn’t died, has he?”

“No, no, he’s breathing,” whispered Hermione, taking the Cauldron Cake Harry passed her.

He might not be very good company, but Professor Lupin’s presence in their compartment had its uses. Midafternoon, just as it had started to rain, blurring the rolling hills outside the window, they heard footsteps in the corridor again, and their three least favorite people appeared at the door: Draco Malfoy, flanked by his cronies, Vincent Crabbe and Gregory Goyle.

Draco Malfoy and Harry had been enemies ever since they had met on their very first train journey to Hogwarts. Malfoy, who had a pale, pointed, sneering face, was in Slytherin House; he played Seeker on the Slytherin Quidditch team, the same position that Harry played on the Gryffindor team. Crabbe and Goyle seemed to exist to do Malfoy’s bidding. They were both wide and muscled; Crabbe was taller, with a pudding-bowl haircut and a very thick neck; Goyle had short, bristly hair and long, gorilla-ish arms.

“Well, look who it is,” said Malfoy in his usual lazy drawl, pulling open the compartment door. “Potty and the Weasel.”

Crabbe and Goyle chuckled trollishly.

をした。

「ウィーズリー、君の父親がこの夏やっと小金を手にしたって聞いたよ。母親がショックで死ななかったかい？」

ロンが出し抜けに立ち上がった拍子に、クルックシャンクスの籠を床に叩き落としてしまった。

ルーピン先生がいびきをかいだ。

「そいつは誰だー」

ルーピンを見つけたとたん、マルフォイが無意識に一歩引いた。

「新しい先生だ」

ハリーは、そう答えながら、もしかしたらロンを引き止めなければならないかもしれないと、自分も立ち上がっていた。

「マルフォイ、いまなんて言ったんだ？」

マルフォイは薄青い目を細めた。

先生の鼻先で喧嘩を吹っかけるほどバカではない。

「いくぞ」マルフォイは苦々しげにクラブとゴイルに声をかけ、姿を消した。

ハリーとロンはまた座った。ロンは拳をさすっていた。

「今年はマルフォイにゴチャゴチャ言わせないぞ」ロンは熱くなっていた。

「本気だ。僕の家族の悪口を一言でも言ってみろ。首根っこを捕まえて、こうやってー」

ロンは空を切るように乱暴な動作をした。

「ロン」ハーマイオニーがルーピン先生を指差してしつと言った。

「気をつけてよ……」

ルーピン先生はそれでもぐっすり眠り続けていた。

汽車がさらに北へ進むと、雨も激しさを増した。

窓の外は雨足がかすかに光るだけの灰色一色で、その色も墨色に変わり、やがて通路と荷

“I heard your father finally got his hands on some gold this summer, Weasley,” said Malfoy. “Did your mother die of shock?”

Ron stood up so quickly he knocked Crookshanks’s basket to the floor. Professor Lupin gave a snort.

“Who’s that?” said Malfoy, taking an automatic step backward as he spotted Lupin.

“New teacher,” said Harry, who got to his feet, too, in case he needed to hold Ron back. “What were you saying, Malfoy?”

Malfoy’s pale eyes narrowed; he wasn’t fool enough to pick a fight right under a teacher’s nose.

“C’m on,” he muttered resentfully to Crabbe and Goyle, and they disappeared.

Harry and Ron sat down again, Ron massaging his knuckles.

“I’m not going to take any crap from Malfoy this year,” he said angrily. “I mean it. If he makes one more crack about my family, I’m going to get hold of his head and —”

Ron made a violent gesture in midair.

“Ron,” hissed Hermione, pointing at Professor Lupin, “be *careful* ...”

But Professor Lupin was still fast asleep.

The rain thickened as the train sped yet farther north; the windows were now a solid, shimmering gray, which gradually darkened until lanterns flickered into life all along the corridors and over the luggage racks. The train

物棚にポッとランプが点った。

汽車はガタゴト揺れ、雨は激しく窓を打ち、風は唸りをあげた。

それでもルーピン先生は眠っている。

「もう着くころだ」

ロンが身を乗り出し、ルーピン先生の体越しに、もう真っ暗になっている窓の外を見た。

ロンの言葉が終わるか終わらないうちに、汽車が速度を落としはじめた。

「調子いいぞ」

ロンは立ち上がり、そっとルーピン先生のわきをすり抜けて窓から外を見ようとした。

「腹ペコだ。宴会が待ち遠しい……」

「まだ着かないはずよ」ハーマイオニーが時計を見ながら言った。

「じゃ、なんで止まるんだ？」

汽車はますます速度を落とした。

ピストンの音が弱くなり、窓を打つ雨風の音が一層激しく聞こえた。

一番ドアに近いところにいたハリーが立ち上がって、通路の様子を窺った。

同じ車両のどのコンパートメントからも、不思議そうな顔が突き出していた。

汽車がガクンと止まった。

どこか遠くの方から、ドサリ、ドシンと荷物棚からトランクが落ちる音が聞こえてきた。

そして、なんの前触れもなく、明りがいっせいに消え、あたりが急に真っ暗闇になった。

「いったい何が起こったんだ？」ハリーの後ろでロンの声がした。

「イタッ！」ハーマイオニーがうめいた。

「ロン、いまの、私の足だったのよ！」

ハリーは手探りで自分の席に戻った。

「故障しちゃったのかな？」

「さあ……」

引っ掻くような音がして、ハリーの目にロン

rattled, the rain hammered, the wind roared, but still, Professor Lupin slept.

“We must be nearly there,” said Ron, leaning forward to look past Professor Lupin at the now completely black window.

The words had hardly left him when the train started to slow down.

“Great,” said Ron, getting up and walking carefully past Professor Lupin to try and see outside. “I’m starving. I want to get to the feast. …”

“We can’t be there yet,” said Hermione, checking her watch.

“So why’re we stopping?”

The train was getting slower and slower. As the noise of the pistons fell away, the wind and rain sounded louder than ever against the windows.

Harry, who was nearest the door, got up to look into the corridor. All along the carriage, heads were sticking curiously out of their compartments.

The train came to a stop with a jolt, and distant thuds and bangs told them that luggage had fallen out of the racks. Then, without warning, all the lamps went out and they were plunged into total darkness.

“What’s going on?” said Ron’s voice from behind Harry.

“Ouch!” gasped Hermione. “Ron, that was my foot!”

の輪郭がぼんやりと見えた。

ロンは窓ガラスの曇り丸く拭き、外を覗いていた。

「なんだかあっちで動いてる。誰か乗り込んでくるみたいだ」ロンが言った。

コンパートメントのドアが急に開き、誰かがハリーの脚の上に倒れ込んできて、ハリーは痛い思いをした。

「ごめんね！なにがどうなったかわかる？アイタッ！ごめんねー」

「やあ、ネビル」ハリーは闇の中を手探りでネビルのマントをつかみ、助け起こした。

「ハリー？君なの？どうなってるの？」

「わからない。座ってー」

シャーッと大きな鳴き声、続いて痛そうな叫び声が聞こえた。

ネビルがクルックシャンクスの上に座ろうとしたのだ。

「私、運転手のところに行って、何事なのか聞いてくるわ」ハーマイオニーの声だ。

ハリーはハーマイオニーが前を通り過ぎる気配を感じた。

それからドアを開ける昔、続いてドシンという音と、痛そうな叫び声が二人分聞こえた。

「だあれ？」

「そっちこそだあれ？」

「ジニーなの？」

「ハーマイオニー？」

「何してるの？」

「ロンを探してるの？」

「入って、ここに座れよ？」

「ここじゃないよ！」ハリーが慌てて言った。

「ここは僕がいるんだ！」

「アイタッ！」ネビルだ。

「静かに！」突然しわがれ声がした。

Harry felt his way back to his seat.

“D’you think we’ve broken down?”

“Dunno ...”

There was a squeaking sound, and Harry saw the dim black outline of Ron, wiping a patch clean on the window and peering out.

“There’s something moving out there,” Ron said. “I think people are coming aboard. ...”

The compartment door suddenly opened and someone fell painfully over Harry’s legs.

“Sorry — d’you know what’s going on? — Ouch — sorry —”

“Hullo, Neville,” said Harry, feeling around in the dark and pulling Neville up by his cloak.

“Harry? Is that you? What’s happening?”

“No idea — sit down —”

There was a loud hissing and a yelp of pain; Neville had tried to sit on Crookshanks.

“I’m going to go and ask the driver what’s going on,” came Hermione’s voice. Harry felt her pass him, heard the door slide open again, and then a thud and two loud squeals of pain.

“Who’s that?”

“Who’s *that*?”

“Ginny?”

“Hermione?”

“What are you doing?”

“I was looking for Ron —”

ルーピン先生がついに目を覚ましたらしい。
先生のいる奥の方で何か動く音をハリーは聞いた。

みんなが黙った。

柔らかなカチリという音のあとに、灯りが揺らめき、コンパートメントを照らした。

ルーピン先生は手の平いっぱい炎を持っているようだった。

炎が先生の疲れたような灰色の顔を照らした。

目だけが油断なく、鋭く警戒していた。

「動くんじゃない」

さっきと同じしわがれ声でそう言うと、先生はゆっくりと立ち上がり、手の平の灯りを前に突き出した。

先生がドアに辿り着く前に、ドアがゆっくりと開いた。

ルーピン先生が手にした揺らめく炎に照らし出され、入口に立っていたのは、マントを着た、天井までも届きそうな黒い影だった。

顔はすっぽりと頭巾で覆われている。

ハリーは上から下へとその影に目を走らせた。

そして、胃が縮むようなものを見てしまった。

マントから突き出している手、それは灰白色に冷たく光り、穢らわしいかさぶたに覆われ、水中で腐敗した死骸のような手……。

ほんの一瞬しか見えなかった。まるでその生き物がハリーの視線に気づいたかのように、その手は黒い覆いの襲の中へ突如引っ込められた。

それから頭巾に覆われた得体の知れない何者かが、ゼイゼイと音を立てながらゆっくりと長く息を吸い込んだ。

まるでその周囲から、空気以外の何かを吸い込もうとしているかのようにだった。

ぞーっとするような冷気が全員を襲った。

“Come in and sit down —”

“Not here!” said Harry hurriedly. “I’m here!”

“Ouch!” said Neville.

“Quiet!” said a hoarse voice suddenly.

Professor Lupin appeared to have woken up at last. Harry could hear movements in his corner. None of them spoke.

There was a soft, crackling noise, and a shivering light filled the compartment. Professor Lupin appeared to be holding a handful of flames. They illuminated his tired, gray face, but his eyes looked alert and wary.

“Stay where you are,” he said in the same hoarse voice, and he got slowly to his feet with his handful of fire held out in front of him.

But the door slid slowly open before Lupin could reach it.

Standing in the doorway, illuminated by the shivering flames in Lupin’s hand, was a cloaked figure that towered to the ceiling. Its face was completely hidden beneath its hood. Harry’s eyes darted downward, and what he saw made his stomach contract. There was a hand protruding from the cloak and it was glistening, grayish, slimy-looking, and scabbed, like something dead that had decayed in water. ...

But it was visible only for a split second. As though the creature beneath the cloak sensed Harry’s gaze, the hand was suddenly withdrawn into the folds of its black cloak.

ハリーは自分の息が胸の途中でつかえたような気がした。

寒気がハリーの皮膚の下深く潜り込んでいった。

ハリーの胸の中へ、そしてハリーの心臓そのものへと……。

ハリーの目玉が引っくり返った。何も見えない。ハリーは冷気に溺れていった。

耳の中に、まるで水が流れ込むような音がした。下へ下へと引き込まれていく。

唸りがだんだん大きくなる……。すると、どこか遠くから叫び声が聞こえた。

ぞっとするような怯えた叫び、哀願の叫びだ。誰か知らないその人を、ハリーは助けたかった。

腕を動かそうとしたが、どうにもならない……。濃い霧がハリーの周りに、ハリーの体の中に渦巻いている――。

「ハリー！ ハリー！ しっかりして」

誰かがハリーの頬を叩いている。暖かく柔らかで心地のよい手だった。

「ウ、うーん？」

ハリーは目を開けた。

体の上にランプがあった。

床が揺れている――ホグワーツ特急が再び動き出し、車内はまた明るくなっていた。

ハリーは座席から床に滑り落ちたらしい。

ロンとハーマイオニーがわきにかがみ込んでいた。

その上からネビルとルーピン先生が覗き込んでいるのが見えた。

ハリーはとても気分が悪かった。鼻のメガネを押し上げようと手を当てると、顔に冷や汗が流れていた。

ロンとハーマイオニーがハリーを抱えて席に戻した。

「大丈夫かい？」 ロンが恐々聞いた。

And then the thing beneath the hood, whatever it was, drew a long, slow, rattling breath, as though it were trying to suck something more than air from its surroundings.

An intense cold swept over them all. Harry felt his own breath catch in his chest. The cold went deeper than his skin. It was inside his chest, it was inside his very heart. ...

Harry's eyes rolled up into his head. He couldn't see. He was drowning in cold. There was a rushing in his ears as though of water. He was being dragged downward, the roaring growing louder ...

And then, from far away, he heard screaming, terrible, terrified, pleading screams. He wanted to help whoever it was, he tried to move his arms, but couldn't ... a thick white fog was swirling around him, inside him —

“Harry! Harry! Are you all right?”

Someone was slapping his face.

“W — what?”

Harry opened his eyes; there were lanterns above him, and the floor was shaking — the Hogwarts Express was moving again and the lights had come back on. He seemed to have slid out of his seat onto the floor. Ron and Hermione were kneeling next to him, and above them he could see Neville and Professor Lupin watching. Harry felt very sick; when he put up his hand to push his glasses back on, he felt cold sweat on his face.

Ron and Hermione heaved him back onto

<p>「ああ」</p> <p>ハリーはドアの方をチラツと見た。頭巾の生き物は消えていた。</p> <p>「何が起こったの？ どこに行ったんだ？ あいつは——誰が叫んだの？」</p> <p>「誰も叫びやしないよ」ますます心配そうにロンが答えた。</p> <p>ハリーは明るくなったコンパートメントをぐるりと見た。</p> <p>ジニーとネビルが、二人とも蒼白な顔でハリーを見返していた。</p> <p>「でも、僕、叫び声を聞いたんだ——」</p> <p>パキッという大きな音で、みんな飛び上がった。</p> <p>ルーピン先生が巨大な板チョコを割っていた。先生がハリーに特別大きい一切れを渡しながら言った。</p> <p>「食べるといい。気分がよくなるから」ハリーは受け取ったが食べなかった。</p> <p>「あれはなんだったのですか？」ハリーがルーピン先生に聞いた。</p> <p>「ディメンター、吸魂鬼だ」ほかのみんなにもチョコレートを配りながら、ルーピン先生が答えた。</p> <p>「アズカバンの吸魂鬼の一人だ」みないっせいに先生を見つめた。</p> <p>ルーピン先生は空になったチョコレートの包み紙をクシャクシャ丸めてポケットに入れた。</p> <p>「食べなさい」先生がくり返した。</p> <p>「元気になる。わたしは運転手と話してこなければ。失礼……」</p> <p>先生はハリーのわきをゆらりと通り過ぎ、通路へと消えた。</p> <p>「ハリー、ほんとに大丈夫？」ハーマイオニーが心配そうにハリーをじっと見た。</p> <p>ハリーの膝に置かれたハーマイオニーの手から暖かな生気が吹き込まれていくようだった</p>	<p>his seat.</p> <p>“Are you okay?” Ron asked nervously.</p> <p>“Yeah,” said Harry, looking quickly toward the door. The hooded creature had vanished. “What happened? Where’s that — that thing? Who screamed?”</p> <p>“No one screamed,” said Ron, more nervously still.</p> <p>Harry looked around the bright compartment. Ginny and Neville looked back at him, both very pale.</p> <p>“But I heard screaming —”</p> <p>A loud snap made them all jump. Professor Lupin was breaking an enormous slab of chocolate into pieces.</p> <p>“Here,” he said to Harry, handing him a particularly large piece. “Eat it. It’ll help.”</p> <p>Harry took the chocolate but didn’t eat it.</p> <p>“What was that thing?” he asked Lupin.</p> <p>“A dementor,” said Lupin, who was now giving chocolate to everyone else. “One of the dementors of Azkaban.”</p> <p>Everyone stared at him. Professor Lupin crumpled up the empty chocolate wrapper and put it in his pocket.</p> <p>“Eat,” he repeated. “It’ll help. I need to speak to the driver, excuse me ...”</p> <p>He strolled past Harry and disappeared into the corridor.</p> <p>“Are you sure you’re okay, Harry?” said</p>
--	---

た。

「僕、わけがわからない……何があったの？」ハリーはまだ流れている額の汗を拭いた。

「ええ——あれが——あの吸魂鬼が——あそこに立って、ぐるりと見回したの……っていうか、そう思っただけ。だって顔が見えなかったんだもの……そしたら——あなたが——あなたが——

「僕、君が引き付けかなんか起こしたのかと思った」ロンが言った。

まだ恐ろしさが消えない顔だった。

「君、なんだか硬直して、座席から落ちて、ヒクヒクしはじめたんだ——」

「そしたら、ルーピン先生があなたを跨いで吸魂鬼の方に歩いて行って、杖を取り出したの」ハーマイオニーが続けた。

「そしてこう言ったわ。『シリウス・ブラックをマントの下に匿っている者は誰もいない。去れ』って。でも、あいつは動かなかった。そしたら先生が何かブツブツ唱えて、吸魂鬼に向かって何か銀色のものが杖から飛び出して、そしたら、あいつは背を向けてスーツといなくなったの……」

「怖かったよお」ネビルの声がいつもより上ずっていた。

「あいつが入ってきたときどんなに寒かったか、みんな感じたよね？」

「僕、妙な気持になった」ロンが気持悪そうに肩を揺すった。

「もう一生楽しい気分になれないんじゃないかって……」

ジニーはハリーと同じくらい気分が悪そうで、隅の方で膝を抱え、小声ですすりあげた。

ハーマイオニーがそばに行って、慰めるようにジニーを抱いた。

「だけど、誰か——座席から落ちた？」ハリーが気まずそうに聞いた。

「ウウン」ロンがまた心配そうにハリーを見

Hermione, watching Harry anxiously.

“I don’t get it. ... What happened?” said Harry, wiping more sweat off his face.

“Well — that thing — the dementor — stood there and looked around (I mean, I think it did, I couldn’t see its face) — and you — you —”

“I thought you were having a fit or something,” said Ron, who still looked scared. “You went sort of rigid and fell out of your seat and started twitching —”

“And Professor Lupin stepped over you, and walked toward the dementor, and pulled out his wand,” said Hermione, “and he said, ‘None of us is hiding Sirius Black under our cloaks. Go.’ But the dementor didn’t move, so Lupin muttered something, and a silvery thing shot out of his wand at it, and it turned around and sort of glided away. ...”

“It was horrible,” said Neville, in a higher voice than usual. “Did you feel how cold it got when it came in?”

“I felt weird,” said Ron, shifting his shoulders uncomfortably. “Like I’d never be cheerful again. ...”

Ginny, who was huddled in her corner looking nearly as bad as Harry felt, gave a small sob; Hermione went over and put a comforting arm around her.

“But didn’t any of you — fall off your seats?” said Harry awkwardly.

“No,” said Ron, looking anxiously at Harry

た。

「ジニーがめちゃくちゃ震えてたけど……」

ハリーにはなんだかわからなかった。ひどい
流感の痛みあがりのように、弱り、震えてい
た。しかも恥ずかしくなってきた。

ほかのみんなは大丈夫だったのに、なぜ自分
だけがこんなにひどいことになったのだろ
う？

ルーピン先生が戻ってきた。入ってくるな
り、先生はちょっと立ち止まり、みんなを見
回して、ふっと笑った。

「おやおや、チョコレートに毒なんか入れて
ないよ……」

ハリーは一口齧った。

驚いたことに、たちまち手足の先まで一気に
暖かさが広がった。

「あと十分でホグワーツに着く。ハリー、大
丈夫かい？」ルーピン先生が言った。

なぜ自分の名前を知っているのか、ハリーは
開かなかった。

「はい」バツが悪くて、ハリーは呟くように
答えた。

到着まで、みんな口数が少なかった。やっ
と、汽車はホグズミード駅で停車し、みんな
が下車するのでひと騒動だった。

ふくろうがホーホー、猫はニャンニャン、ネ
ビルのパットのヒキガエルは帽子の下でゲロ
ゲロ鳴いた。

狭いプラットホームは凍るような冷たさで、
氷のような雨が叩きつけていた。

「イチ(一)年生はこっちだ！」

懐かしい声が聞こえた。ハリー、ロン、ハー
マイオニーが振り向くと、プラットホームの
むこう端にハグリッドの巨大な姿の輪郭が見
えた。びくびくの新入生を、例年のように湖
を渡る旅に連れていくために、ハグリッドが
手招きしている。

「三人とも元気かー？」

ハグリッドが群れの頭越しに大声で呼びかけ

again. “Ginny was shaking like mad,
though. ...”

Harry didn’t understand. He felt weak and
shivery, as though he were recovering from a
bad bout of flu; he also felt the beginnings of
shame. Why had he gone to pieces like that,
when no one else had?

Professor Lupin had come back. He paused
as he entered, looked around, and said, with a
small smile, “I haven’t poisoned that chocolate,
you know. ...”

Harry took a bite and to his great surprise
felt warmth spread suddenly to the tips of his
fingers and toes.

“We’ll be at Hogwarts in ten minutes,” said
Professor Lupin. “Are you all right, Harry?”

Harry didn’t ask how Professor Lupin knew
his name.

“Fine,” he muttered, embarrassed.

They didn’t talk much during the remainder
of the journey. At long last, the train stopped at
Hogsmeade station, and there was a great
scramble to get outside; owls hooted, cats
meowed, and Neville’s pet toad croaked loudly
from under his hat. It was freezing on the tiny
platform; rain was driving down in icy sheets.

“Firs’ years this way!” called a familiar
voice. Harry, Ron, and Hermione turned and
saw the gigantic outline of Hagrid at the other
end of the platform, beckoning the terrified-
looking new students forward for their
traditional journey across the lake.

た。

三人ともハグリッドに手を振ったが、話しかける機会がなかった。周りの人波が、三人をホームからそれる方向へと押し流していた。三人ともその流れについていき、凸凹のぬかるんだ馬車道に出た。そこに、ざっと百台の馬車が生徒たちを待ち受けていた。

馬車は透明の馬に引かれている、と、ハリーはそう思うしかなかった。

なにしろ、馬車に乗り込んで扉を閉めると、独りでに馬車が走り出し、ガタゴトと揺れながら隊列を組んで進んでいくのだ。

馬車はかすかに黴と藁の匂いがした。

チョコレートを食べってから、気分がよくなってはいたが、ハリーはまだ体に力が入らなかった。

ロンとハーマイオニーは、ハリーがまた気絶することを恐れているかのように、横目でしょっちゅうハリーを見ていた。

馬車は壮大な鑄鉄の門をゆるゆると走り抜けた。門の両脇に石柱があり、そのてっぺんに羽を生やしたイ！シシの像が立っている。

頭巾をかぶった、聳え立つような吸魂鬼がここにも二人、門の両脇を警護しているのをハリーは見た。

またしても冷たい吐き気に襲われそうになく、ハリーはボコボコした座席のクッションに深々と寄りかかり、門を通過し終わるまで目を閉じていた。城に向かう長い上り坂で、馬車はさらに速度を上げていった。

ハーマイオニーは小窓から身を乗り出し、城の尖塔や大小の塔がだんだん近づいてくるのを眺めていた。

ついに、ひと揺れして馬車が止まった。

ハーマイオニーとロンが降りた。

ハリーが降りるとき、気取った、いかにもうれしそうな声が聞こえてきた。

「ポッター、気絶したんだって？ ロングボトムはほんとうのことを言ってるのかな？ ほんとうに気絶なんかしたのかい？」

“All righ’, you three?” Hagrid yelled over the heads of the crowd. They waved at him, but had no chance to speak to him because the mass of people around them was shunting them away along the platform. Harry, Ron, and Hermione followed the rest of the school along the platform and out onto a rough mud track, where at least a hundred stagecoaches awaited the remaining students, each pulled, Harry could only assume, by an invisible horse, because when they climbed inside and shut the door, the coach set off all by itself, bumping and swaying in procession.

The coach smelled faintly of mold and straw. Harry felt better since the chocolate, but still weak. Ron and Hermione kept looking at him sideways, as though frightened he might collapse again.

As the carriage trundled toward a pair of magnificent wrought iron gates, flanked with stone columns topped with winged boars, Harry saw two more towering, hooded dementors, standing guard on either side. A wave of cold sickness threatened to engulf him again; he leaned back into the lumpy seat and closed his eyes until they had passed the gates. The carriage picked up speed on the long, sloping drive up to the castle; Hermione was leaning out of the tiny window, watching the many turrets and towers draw nearer. At last, the carriage swayed to a halt, and Hermione and Ron got out.

As Harry stepped down, a drawling, delighted voice sounded in his ear.

マルフォイは肘でハーマイオニーを押し退け、ハリーと城への石段との間に立ちはだかった。

いじわるに顔を輝かせ、薄青い目が意地悪に光っている。

「うせろ、マルフォイ」ロンは歯を食いしばっていた。

「ウィーズリー、君も気絶したのかー」マルフォイは大声で言った。

「あのこわーい吸魂鬼で、ウィーズリー、君も縮み上がったのかい？」

「どうしたんだい？」

穏やかな声が出た。ルーピン先生がつぎの馬車から降りてきたところだった。

マルフォイは横柄な目つきでルーピン先生をジロジロ見た。

その目でローブの継ぎ接ぎや、ポロポロのカバンを眺め回した。

「いいえ、何もーえーとー先生」

マルフォイの声にかすかに皮肉が込められていた。

クラブとゴイルに向かってにんまり笑い、マルフォイは二人を引き連れて城への石段を上った。

ハーマイオニーがロンの背中を突ついて急がせた。生徒の群がる石段を、三人は群れに混じって上り、正面玄関の巨大な樫の扉を通り、広々とした玄関ホールに入った。

そこは松明で明々と照らされ、上階に通ずる壮大な大理石の階段があった。

右の方に大広間への扉が開いていた。ハリーは群れの流れについて中に入った。

大広間の天井は魔法で今日の夜空と同じ雲の多い真っ暗な空に変えられていたが、それを一目見る間もなく、誰かに名前を呼ばれた。

「ポッター！ グレンジャー！ 二人とも私のところにおいでなさい！」

二人が驚いて振り向くと、変身術の先生でグリフィンボールの寮監、マクゴナガル先生

“You *fainted*, Potter? Is Longbottom telling the truth? You actually *fainted*?”

Malfoy elbowed past Hermione to block Harry’s way up the stone steps to the castle, his face gleeful and his pale eyes glinting maliciously.

“Shove off, Malfoy,” said Ron, whose jaw was clenched.

“Did you faint as well, Weasley?” said Malfoy loudly. “Did the scary old dementor frighten you too, Weasley?”

“Is there a problem?” said a mild voice. Professor Lupin had just gotten out of the next carriage.

Malfoy gave Professor Lupin an insolent stare, which took in the patches on his robes and the delapidated suitcase. With a tiny hint of sarcasm in his voice, he said, “Oh, no — er — *Professor*,” then he smirked at Crabbe and Goyle and led them up the steps into the castle.

Hermione prodded Ron in the back to make him hurry, and the three of them joined the crowd swarming up the steps, through the giant oak front doors, into the cavernous entrance hall, which was lit with flaming torches, and housed a magnificent marble staircase that led to the upper floors.

The door into the Great Hall stood open at the right; Harry followed the crowd toward it, but had barely glimpsed the enchanted ceiling, which was black and cloudy tonight, when a voice called, “Potter! Granger! I want to see

が、生徒たちの頭越しにむこうの方から呼んでいた。厳格な顔をした先生で、髪をきっちりと菅に結い、四角い縁のメガネの奥に鋭い目があった。

人温みを搔き分けて先生の方に歩きながら、ハリーは不吉な予感がした。

マクゴナガル先生はなぜか、自分が悪いことをしたに違いないという気持ちにさせる。

「そんな心配そうな顔をしないでよろしいーちょっと私の事務室で話があるだけです」

先生は二人にそう言った。

「ウィーズリー、あなたはみんなと行きなさい」

マクゴナガル先生がハリーとハーマイオニーを引き連れてにぎやかな生徒の群れから離れていくのを、ロンはじっと不思議そうに見つめていた。

二人は先生について、玄関ホールを横切り、大理石の階段を上がり、ろうか廊下を歩いた。

事務室に着くと、先生は二人に座るよう合図した。小さな部屋には、心地よい暖炉の火が勢いよく燃えていた。

先生は事務机のむこう側に座り、唐突に切り出した。

「ルーピン先生が前もってふくろう便をくださいました。ポッター、汽車の中で気分が悪くなったそうですね」

ハリーが答える前に、ドアを軽くノックする音がした。

校医のマダム・ボンフリーが気ぜわしく入ってきた。

ハリーは顔が熱くなるのを感じた。気絶したのか、なんだったのかは別にして、それだけで十分恥ずかしいのに、みんなが大騒ぎするなんて。

「僕、大丈夫です。なんにもする必要がありません」ハリーが言った。

「おや、またあなたなの？」

you both!”

Harry and Hermione turned around, surprised. Professor McGonagall, Transfiguration teacher and head of Gryffindor House, was calling over the heads of the crowd. She was a stern-looking witch who wore her hair in a tight bun; her sharp eyes were framed with square spectacles. Harry fought his way over to her with a feeling of foreboding: Professor McGonagall had a way of making him feel he must have done something wrong.

“There’s no need to look so worried — I just want a word in my office,” she told them. “Move along there, Weasley.”

Ron stared as Professor McGonagall ushered Harry and Hermione away from the chattering crowd; they accompanied her across the entrance hall, up the marble staircase, and along a corridor.

Once they were in her office, a small room with a large, welcoming fire, Professor McGonagall motioned Harry and Hermione to sit down. She settled herself behind her desk and said abruptly, “Professor Lupin sent an owl ahead to say that you were taken ill on the train, Potter.”

Before Harry could reply, there was a soft knock on the door and Madam Pomfrey, the nurse, came bustling in.

Harry felt himself going red in the face. It was bad enough that he’d passed out, or whatever he had done, without everyone mak-

マダム・ボンフリーはハリーの言葉を無視し、かがみ込んでハリーを近々と見つめた。

「さしずめ、また何か危険なことをしたのでしょうか？」

「ポッピー、吸魂鬼なのよ」マクゴナガル先生が言った。

二人は暗い表情で目を見交わした。マダム・ボンフリーは不満そうな声を出した。

「吸魂鬼を学校の周りに放つなんて」

マダム・ボンフリーはハリーの前髪を掻き上げて額の熱を測りながら呟いた。

「倒れるのはこの子だけではないでしょうよ。そう、この子はすっかり冷えきってます。恐ろしい連中ですよ、あいつらは。もともと繊細な者に連中がどんな影響を及ぼすことか——」

「僕、繊細じゃありません！」ハリーは反発した。

「ええ、そうじゃありませんとも」

マダム・ボンフリーは、今度はハリーの脈を取りながら、上の空で答えた。

「この子にはどんな処置が必要ですか？」マクゴナガル先生がきびきびと聞いた。

「絶対安静ですか？ 今夜は医務室に泊めた方がよいのでは？」

「僕、大丈夫です！」ハリーは弾けるように立ち上がった。

病棟に入院させられたとなればドラコ・マルフォイに何を言われるか、考えただけで苦痛だった。

「そうね、少なくともチョコレートは食べさせないと」

今度はハリーの目を覗き込もうとしながら、マダム・ボンフリーが言った。

「もう食べました。ルーピン先生がくださいました。みんなにくださったんです」ハリーが言った。

「そう。ほんとうに？」マダム・ボンフリーは満足げだった。

ing all this fuss.

“I’m fine,” he said, “I don’t need anything —”

“Oh, it’s you, is it?” said Madam Pomfrey, ignoring this and bending down to stare closely at him. “I suppose you’ve been doing something dangerous again?”

“It was a dementor, Poppy,” said Professor McGonagall.

They exchanged a dark look, and Madam Pomfrey clucked disapprovingly.

“Setting dementors around a school,” she muttered, pushing back Harry’s hair and feeling his forehead. “He won’t be the last one who collapses. Yes, he’s all clammy. Terrible things, they are, and the effect they have on people who are already delicate —”

“I’m not delicate!” said Harry crossly.

“Of course you’re not,” said Madam Pomfrey absentmindedly, now taking his pulse.

“What does he need?” said Professor McGonagall crisply. “Bed rest? Should he perhaps spend tonight in the hospital wing?”

“I’m *fine*!” said Harry, jumping up. The thought of what Draco Malfoy would say if he had to go to the hospital wing was torture.

“Well, he should have some chocolate, at the very least,” said Madam Pomfrey, who was now trying to peer into Harry’s eyes.

“I’ve already had some,” said Harry. “Professor Lupin gave me some. He gave it to

「それじゃ、『闇の魔術に対する防衛術』の先生がやっと見つかったということね。治療法を知っている先生が」

「ポッター、ほんとうに大丈夫なのですね？」マクゴナガル先生が念を押した。

「はい」ハリーが答えた。

「いいでしょう。ミス・グレンジャーとちょっと時間割の話をする間、外で待っていらっしやい。それから一緒に宴会に参りましょう」

ハリーはマダム・ボンフリーと一緒に廊下に出た。マダム・ボンフリーはまだぶつぶつ独り言を言いながら医務室に戻っていった。

ほんの数分待っただけで、ハーマイオニーがなんだかひどくうれしそうな顔をして現われた。

そのあとからマクゴナガル先生が出てきた。三人でさっき上ってきた大理石の階段を下り、大広間に戻った。

とんがり三角帽子がずらりと並んでいた。寮の長テーブルにはそれぞれの寮生が座り、テーブルの上に浮いている何千本という蠟燭の灯りに照らされて、みんなの顔がチラチラ輝いていた。

クシャクシャな白髪 of の小さな魔法使い、フリットウィック先生が、古めかしい帽子と三本脚の丸椅子を大広間から運び出していた。

「あー」ハーマイオニーが小声で言った。

「組分けを見逃しちゃった！」

ホグワーツの新入生は「組分け帽子」をかぶって、入る寮を決めてもらう。

帽子が、一番ふさわしい寮の名前(グリフィンドール、レイブンクロー、ハッフルパフ、スリザリン)を大声で発表するのだ。

マクゴナガル先生は教職員テーブルの自分の席へと闊歩し、ハリーとハーマイオニーは反対方向のグリフィンドールのテーブルに、できるだけ目立たないように歩いた。

大広間の後ろの方を二人が通ると、周りの生徒が振り返り、ハリーを指差す生徒も何人か

all of us.”

“Did he, now?” said Madam Pomfrey approvingly. “So we’ve finally got a Defense Against the Dark Arts teacher who knows his remedies?”

“Are you sure you feel all right, Potter?” Professor McGonagall said sharply.

“Yes,” said Harry.

“Very well. Kindly wait outside while I have a quick word with Miss Granger about her course schedule, then we can go down to the feast together.”

Harry went back into the corridor with Madam Pomfrey, who left for the hospital wing, muttering to herself. He had to wait only a few minutes; then Hermione emerged looking very happy about something, followed by Professor McGonagall, and the three of them made their way back down the marble staircase to the Great Hall.

It was a sea of pointed black hats; each of the long House tables was lined with students, their faces glimmering by the light of thousands of candles, which were floating over the tables in midair. Professor Flitwick, who was a tiny little wizard with a shock of white hair, was carrying an ancient hat and a three-legged stool out of the hall.

“Oh,” said Hermione softly, “we’ve missed the Sorting!”

New students at Hogwarts were sorted into Houses by trying on the Sorting Hat, which

いた。

吸魂鬼の前で倒れたという話が、そんなに早く伝わったのだろうか？

ロンが席を取ってしてくれた。

ハリーとハーマイオニーはロンの両脇に座った。

「いったいなんだったの？」ロンが小声でハリーに聞いた。

ハリーが耳打ちで説明しはじめたとき、校長先生が挨拶するために立ち上がったので、ハリーは話を中断した。

ダンブルドア校長は、相当の年齢だったが、いつも偉大なエネルギーを感じさせた。

長い銀髪と顎鬚は一メートルあまり、半月形のメガネをかけ、釣鼻が極端に折れ曲がっていた。

しばしば、いまの時代のもっとも偉大な魔法使いと称されていたが、しかし、ハリーはそれだからダンブルドアを尊敬していたのではなかった。

アルバス・ダンブルドアは誰もが自然に信用したくなる気持ちにさせる。

ハリーはダンブルドアがニッコリと生徒たちに笑いかけるのを見ながら、吸魂鬼がコンパートメントに入ってきたとき以来初めて、心から安らいだ気持ちになっていた。

「おめでとう！」

ダンブルドアの顎鬚が蠟燭の光でキラキラ輝いた。

「新学期おめでとう！皆にいくつかお知らせがある。一つはとても深刻な問題じゃから、皆がご馳走でポーッととなる前に片付けてしまう方がよかろうの……」

ダンブルドアは咳払いしてから言葉を続けた。

「ホグワーツ特急での捜査があったから、皆も知っての通り、わが校は、ただいまアズカバンの吸魂鬼、つまりディメンターたちを受け入れておる。魔法省のご用でここに来てお

shouted out the House they were best suited to (Gryffindor, Ravenclaw, Hufflepuff, or Slytherin). Professor McGonagall strode off toward her empty seat at the staff table, and Harry and Hermione set off in the other direction, as quietly as possible, toward the Gryffindor table. People looked around at them as they passed along the back of the hall, and a few of them pointed at Harry. Had the story of his collapsing in front of the dementor traveled that fast?

He and Hermione sat down on either side of Ron, who had saved them seats.

“What was all that about?” he muttered to Harry.

Harry started to explain in a whisper, but at that moment the headmaster stood up to speak, and he broke off.

Professor Dumbledore, though very old, always gave an impression of great energy. He had several feet of long silver hair and beard, half-moon spectacles, and an extremely crooked nose. He was often described as the greatest wizard of the age, but that wasn't why Harry respected him. You couldn't help trusting Albus Dumbledore, and as Harry watched him beaming around at the students, he felt really calm for the first time since the dementor had entered the train compartment.

“Welcome!” said Dumbledore, the candlelight shimmering on his beard. “Welcome to another year at Hogwarts! I have a few things to say to you all, and as one of them is very serious, I think it best to get it out

るのじゃ」

ダンブルドアは言葉を切った。

ハリーはウィーズリー氏が言ったことを思い出した……吸魂鬼が学校を警備することを、ダンブルドアは快く思っていない。

「吸魂鬼たちは学校への入口という入口を固めておく。あの者たちがここにいるかぎり、はっきり言っておくが、だれも許可なしで学校を離れてはならんぞ。ディメンターはいたずらや変装に引っかかるようなシロモ！ではないく『透明マント』でさえムダじゃ」

ダンブルドアがさらりとつけ加えた言葉に、ハリーとロンはチラリと目を見交わした。

「言い訳やお願いを聞いてもらおうとしても、ディメンターには生来できない相談じゃ。それじゃから、一人一人に注意しておく。あの者たちが皆に危害を加えるような口実を与えるではないぞ。監督生よ、男子、女子それぞれの新任の首席よ、頼みましたぞ。誰一人としてディメンターといざこざを起こすことのないよう気をつけるのじゃぞ」

ハリーから数席離れて座っていたパーシーが、またまた胸を張り、もったいぶって周りを見回した。

ダンブルドアはまた言葉を切り、深刻そのものの顔つきで大広間をぐるっと見渡した。

誰一人身動きもせず、声を出す者もいなかった。

「楽しい話に移ろうかの」ダンブルドアが言葉を続けた。

「今学期から、うれしいことに、新任の先生を二人、お迎えすることになった」

「まず、ルーピン先生。ありがたいことに、空席になっている『闇の魔術に対する防衛術』の担当をお引き受けくださった」

パラパラとあまり気のない拍手が起こった。ルーピン先生と同じコンパートメントに居合わせた生徒だけが、ハリーも含めて、大きな拍手をした。ルーピン先生は、一帳羅を着込んだ先生方の間で、一層みすばらしく見え

of the way before you become befuddled by our excellent feast. ...”

Dumbledore cleared his throat and continued, “As you will all be aware after their search of the Hogwarts Express, our school is presently playing host to some of the dementors of Azkaban, who are here on Ministry of Magic business.”

He paused, and Harry remembered what Mr. Weasley had said about Dumbledore not being happy with the dementors guarding the school.

“They are stationed at every entrance to the grounds,” Dumbledore continued, “and while they are with us, I must make it plain that nobody is to leave school without permission. Dementors are not to be fooled by tricks or disguises — or even Invisibility Cloaks,” he added blandly, and Harry and Ron glanced at each other. “It is not in the nature of a dementor to understand pleading or excuses. I therefore warn each and every one of you to give them no reason to harm you. I look to the prefects, and our new Head Boy and Girl, to make sure that no student runs afoul of the dementors,” he said.

Percy, who was sitting a few seats down from Harry, puffed out his chest again and stared around impressively. Dumbledore paused again; he looked very seriously around the hall, and nobody moved or made a sound.

“On a happier note,” he continued, “I am pleased to welcome two new teachers to our

た。

「スネイプを見てしろよ」ロンがハリーの耳もとで囁いた。

魔法薬学のスネイプ先生が教職員テーブルのむこう側からルーピン先生の方を睨んでいた。

スネイプが「闇の魔術に対する防衛術」の席を狙っているのは周知の事実だった。

それでも、頬のこけた土気色の顔を歪めているスネイプのいまの表情には、スネイプが大嫌いなハリーでさえドキリとするものがあった。

怒りを通り越して、憎しみの表情だ。ハリーにはおなじみの、あの表情、スネイプがハリーを見るときの目つきそのものだ。

「もう一人の新任の先生は」

ルーピン先生へのパッとしない拍手がやむのを待って、ダンブルドアが続けた。

「ケトルバーン先生は『魔法生物飼育学』の先生じゃったが、残念ながら前年度末をもって退職なさることになった。手足が一本でも残っているうちに余生を楽しみたいとのことじゃ。そこで後任じゃが、うれしいことに、ほかならぬルビウス・ハグリッドが、現職の森番役に加えて教鞭をとってださることになった」

ハリー、ロン、ハーマイオニーは驚いて顔を見合わせた。そして三人ともみんなと一緒に拍手した。

とくにグリフィンドールからの拍手は割れんばかりだった。

ハリーが身を乗り出してハグリッドを見ると、夕日のように真っ赤な顔をして自分の巨大な手を見つめていた。

うれしそうにほころんだ顔も真っ黒なもじゃもじゃ髭に埋もれていた。

「そうだったのか！」ロンがテーブルを叩きながら叫んだ。

「噛みつく本を教科書指定するなんて、ハグリッド以外にいないよな！」

ranks this year.

“First, Professor Lupin, who has kindly consented to fill the post of Defense Against the Dark Arts teacher.”

There was some scattered, rather unenthusiastic applause. Only those who had been in the compartment on the train with Professor Lupin clapped hard, Harry among them. Professor Lupin looked particularly shabby next to all the other teachers in their best robes.

“Look at Snape!” Ron hissed in Harry’s ear.

Professor Snape, the Potions master, was staring along the staff table at Professor Lupin. It was common knowledge that Snape wanted the Defense Against the Dark Arts job, but even Harry, who hated Snape, was startled at the expression twisting his thin, sallow face. It was beyond anger: it was loathing. Harry knew that expression only too well; it was the look Snape wore every time he set eyes on Harry.

“As to our second new appointment,” Dumbledore continued as the lukewarm applause for Professor Lupin died away. “Well, I am sorry to tell you that Professor Kettleburn, our Care of Magical Creatures teacher, retired at the end of last year in order to enjoy more time with his remaining limbs. However, I am delighted to say that his place will be filled by none other than Rubeus Hagrid, who has agreed to take on this teaching job in addition to his gamekeeping duties.”

Harry, Ron, and Hermione stared at one

ハリー、ロン、ハーマイオニーは一番最後まで拍手し続けた。

ダンブルドア校長がまた話しはじめたとき、ハグリッドがテーブルクロスで目を拭いたのを、三人はしっかりと見た。

「さて、これで大切な話はみな終わった」ダンブルドアが宣言した。

「さあ、宴じゃ！」

とつぜん目の前の金の皿、金の杯に突然食べ物、飲み物が現われた。

ハリーは急に腹ペコになり、手当たりしだいガツガツ食べた。

すばらしいご馳走だった。

大広間には話し声、笑い声、ナイフやフォークの触れ合う音がにぎやかに響き渡った。

それでも、ハリー、ロン、ハーマイオニーは宴会が終わってハグリッドと話をするのが待ち遠しかった。

先生になるということがハグリッドにとってどんなにうれしいことなのか、三人にはよくわかっていた。

ハグリッドは一人前の魔法使いではなかった。

三年生のとき、無実の罪でホグワーツから退校処分を受けたのだ。

ハリー、ロン、ハーマイオニーの三人が、一年前ハグリッドの名誉を回復した。

いよいよ最後に、かぼちゃタルトが金の血から溶けるようになくなり、ダンブルドアがみんな寝る時間だと宣言し、やっと話すチャンスがやってきた。

「おめでとう、ハグリッド！」

三人で教職員テーブルに駆け寄りながら、ハーマイオニーが黄色い声をあげた。

「みんな、おまえら三人のおかげだ」

テカテカに光った顔をナプキンで拭い、ハグリッドは三人を見た。

「信じらんねえ……偉いお方だ、ダンブルドアは……。ケトルバーン先生がもうたくさん

another, stunned. Then they joined in with the applause, which was tumultuous at the Gryffindor table in particular. Harry leaned forward to see Hagrid, who was ruby-red in the face and staring down at his enormous hands, his wide grin hidden in the tangle of his black beard.

“We should’ve known!” Ron roared, pounding the table. “Who else would have assigned us a biting book?”

Harry, Ron, and Hermione were the last to stop clapping, and as Professor Dumbledore started speaking again, they saw that Hagrid was wiping his eyes on the tablecloth.

“Well, I think that’s everything of importance,” said Dumbledore. “Let the feast begin!”

The golden plates and goblets before them filled suddenly with food and drink. Harry, suddenly ravenous, helped himself to everything he could reach and began to eat.

It was a delicious feast; the hall echoed with talk, laughter, and the clatter of knives and forks. Harry, Ron, and Hermione, however, were eager for it to finish so that they could talk to Hagrid. They knew how much being made a teacher would mean to him. Hagrid wasn’t a fully qualified wizard; he had been expelled from Hogwarts in his third year for a crime he had not committed. It had been Harry, Ron, and Hermione who had cleared Hagrid’s name last year.

At long last, when the last morsels of

だって言いなすってから、まっすぐ俺の小屋に
来なさった……こいつは俺がやりたくてた
まんなかったことなんだ……」

感極まって、ハグリッドはナプキンに顔を埋
めた。

マクゴナガル先生が三人にあっちに行きな
さいと合図した。

三人はグリフィンドール生に混じって大理石
の階段を上り、すっかり疲れ果てて、またま
た廊下を通り、またまた階段を上がり、グリ
フィンドール塔の秘密の入口に辿り着いた。

ピンクのドレスを着た「太った婦人」の大き
な肖像画が尋ねた。

「合言葉は？」

「道を空けて！道を空けて！」後ろの方から
パーシーが叫ぶ声がした。

「新しい合言葉は『フォルチュナ・マジョー
ル。たなぼた！』」

「あーあ」

ネビル・ロングボトムが悲しげな声を出し
た。

合言葉を覚えるのがいつも一苦労なのだ。肖
像画の裏の穴を通り、談話室を横切り、女子
寮と男子寮に別れ、それぞれの階段を上った。

ハリーは螺旋階段を上りながら、頭の中はた
だただ帰ってこられてうれしいという思いで
いっぱいだった。

懐かしい、円形の寝室には四本柱の天蓋付き
ベッドが五つ置かれていた。

ハリーはぐると見回わして、やっと我が家
に帰ってきたような気がした。

pumpkin tart had melted from the golden
platters, Dumbledore gave the word that it was
time for them all to go to bed, and they got
their chance.

“Congratulations, Hagrid!” Hermione
squealed as they reached the teachers’ table.

“All down ter you three,” said Hagrid,
wiping his shining face on his napkin as he
looked up at them. “Can’ believe it ... great
man, Dumbledore ... came straight down to
me hut after Professor Kettleburn said he’d had
enough. ... It’s what I always wanted. ...”

Overcome with emotion, he buried his face
in his napkin, and Professor McGonagall
shooed them away.

Harry, Ron, and Hermione joined the
Gryffindors streaming up the marble staircase
and, very tired now, along more corridors, up
more and more stairs, to the hidden entrance to
Gryffindor Tower. A large portrait of a fat lady
in a pink dress asked them, “Password?”

“Coming through, coming through!” Percy
called from behind the crowd. “The new
password’s ‘Fortuna Major’!”

“Oh no,” said Neville Longbottom sadly.
He always had trouble remembering the
passwords.

Through the portrait hole and across the
common room, the girls and boys divided
toward their separate staircases. Harry climbed
the spiral stair with no thought in his head
except how glad he was to be back. They
reached their familiar, circular dormitory with

	its five four-poster beds, and Harry, looking around, felt he was home at last.
--	---